【随　筆】

まさに傷だらけの人生？です

住　吉　　尚
（釧路支部）

私たちは十勝川支流の小河川の築堤上を走っています。遠く並行して走る道路上にはバンディング作業チーム本体の車列が見えます。私の前方遠くにタンチョウが１羽見えました。車列に向かって無線で、「前方にタンチョウが１羽見える。」「もう少し進むとそちらからも見えるはず！」と連絡。タンチョウは我々よりずっと道路寄りですから、あとは向こうの観察で何か言ってくるでしょう。無線が鳴り、「親ヅル１羽にヒナ１羽がいる！」と。さて向こうから作戦の指示がありました。我々は川とツルがいる草地の間にある水路の川側で、ヒナを待ち受ける班です。全員が動き出しました。私は我が班の皆に指示を出しながら、１人で大きく前進して側面を遮断することに。ここには道路側からも１人入ってくるのが見えます。包囲網が狭まってきた時です。ヒナは突然、私と待ち受け班の間を狙って走り始めました。抜けられると大変！私は懸命に走ります。道路側から入った１人が側溝の草地側から、私は側溝の畑側からヒナに向かって走ります。ヒナが側溝に入るのとほぼ同時に２人が追い付きました。「ドボン」向こう側から追いついたメンバーが側溝に飛び込みました。ヒナが私の目の前に現れた時、側溝側のメンバーの「捕獲！」の声が。こうしてまた１羽を無事捕獲して大成功でした。久しぶりに全力疾走？して自分的には素晴らしい走りだった！と思っていましたが、作業が終わる頃に何やら左側太モモの付け根あたりに痛みが。内モモの筋肉の肉離れのようです。だんだん痛くなってきました。さて次の日は幸い捕獲作業がない日でした。でも足は痛くて引きずって歩く状態です。もう１日置いてまた捕獲作業です。この頃には内モモは内出血で真っ黒に。私は皆に「今日は足が痛いので全く走れません。歩くのもやっとですから！」と言いましたが、「そこの畑の縁をゆっくりで良いので歩いて！」と。こうして私は痛い足を引きずってこの日は7,600歩、翌日は9,000歩を歩くことに。それも胴付き長靴を履いて、藪をかき分け、かき分けて、です。作業終了後に家の前で車を降りると、妻が「父さんボロボロだね！」と。足は痛いは、疲れているは。よろよろと家に入る始末。私の真っ黒になった左足は１週間後には足先まで２倍近くにまで腫れ上がって、出血による変色部分は徐々に下がって足の甲まで変色しています。

さて今日は十勝北部、何年か前に１度だけ行ったことがある場所です。全員それぞれの場所に着こうとしていると、ヒナが藪へと消えそうです。急いで私もヒナが消えた藪の方へと向かいました。藪の向こうは放牧地でバラ線が張ってありました。背負っていたザックを放り投げ、バラ線を何とかくぐると親のツルが妙な格好で藪に座っています。近付くとなんとこのツルは両足をバラ線に引っ掛けて身動きができなくなっていました。近くのメンバーに声をかけ救出作業です。親のツルはヒナとは違い力もあり、嘴も爪も大変鋭いので素人には扱えません。慎重にそして素早く作業を行い救出しましたが、私は両腕にタンチョウの爪で傷が！足は痛い、そして腕も痛い、まさに傷だらけです。

ところで今年は上川支部の猪股先生が大活躍してくれました。また毎年のことですが、根室方面のバンディン

ヒナと猪股先生

ヒナと熊井２号先生

捕まえたヒナと私

グでは根室支部の熊井２号先生に活躍していただきました。何で２号か？ですか、１号は奥様で、奥様の方が先に参加したので、「旦那は２号と呼んで」との奥様のお言葉の通りにしているからです。そして私も何とか１羽捕獲することができました。この写真は足を痛める前で、しかも２つのＤ型ハウスの間の幅２ｍほどのヨモギの藪を、向こう側から２人のメンバーに追われて私の前に出てきたもので、「捕ったぞー！」と叫ぶようなものではありませんでした。今年は用意されている足輪が30個しかありません。途中で足輪がなくなり、作業終了となるようにと頑張りましたが、後半は日に１羽がやっとで、０の日はありませんでしたが、なかなか足輪はなくなりません。

未舗装の道路上です。スラリータンカーを引いて大型のトラクターが走っていきます。スラリータンカーって何？と言う方に。牛の糞尿を液体としてタンクに貯めるのですが、これを採草地にまくためのタンク車のことです。大きなタンクですから重いので、草地が痛まないように大きなタイヤが付いています。今走っているタンカーは８本ものタイヤですから土埃も半端ではありません。それを引くトラクターのタイヤは直径が人の背丈ほどもあります。そんな道路脇で捕まえたタンチョウのヒナに足輪を付けています。広い湿原でもなければ牧歌的な緑の中でもありません。何とも埃っぽい場所での作業となりました。そのタンチョウ家族は大きな起伏のある牧草地の高いところにいました。採草地は刈ったばかりで隠れるところはありません。１枚向こうの採草地では盛んにスラリータンカーが糞尿散布をしています。舗装道路側に人がいるので、タンチョウ親子は私たちがいる未舗装道路側の道路脇にいます。と言っても、とても高い急斜面の上にいるので未舗装道路側からは見えません。私たちはこの未舗装道路から更に草地へと入る取り付け道に入ってツルを囲むことに。でもその時、タンチョウは未舗装道路側の藪へと入りそうになっていましたから、私以外のメンバーは未舗装道路で待機を指示。でもツルを見失ったときです。２羽の親鳥が飛んで逃げました。こうなるとヒナを捜索するしかありません。私はこの道路脇の藪にいるに違いないと思い、メンバーに藪を横断するように並んでもらい、道路に沿って捜索です。でも見つかりません。最後に「未舗装道路と草地の取り付け道の交点まで行って終りにしましょう。」とメンバーに呼びかけ再度出発しました。まもなくです、私の横にいたメンバーが「いた！」と叫び、すかさず藪に伏せました。「捕獲！」私は無線でここ以外に散らばっていたメンバーに知らせます。やっと１羽。今日はこれまでに３カ所も作戦をやって失敗の連続でした。もう４時です。こうしてタンチョウのバンディング作業は11日間で27羽に足輪を付けて終了となりました。参加した皆さんはご苦労さんでした。そして痛い足を引きずり頑張った私にも、自分で「良く頑張ったで賞」をやることにしました。この左足は１カ月経った今では腫れは引きましたが、色々な場所に傷みが残っています。完治するのはいつのことになるのやら。

ところで釧路川流域で捕獲したタンチョウの１羽に、目の瞬膜に異常がある個体がいました。瞬膜が大きく膨らんでいて、中に透明な液体でも入っているように見えましたが、何も道具を持っていないのでそのまま放鳥しました。どなたか鳥の瞬膜異常に詳しい方がおられたら

瞬膜の異常個体

瞬膜の異常個体

助言をいただきたい。ちなみに私が見たタンチョウのヒナはもう300羽以上になりますが、目の異常はこの個体が初めてです。タンチョウのヒナの体に異常があるのを見たのは、舌の先端が少し短いもの、くるりと巻き舌になったものなどで３羽ほど、爪が真っすぐ地面に着いていないために横になって小さく曲がっているものが１羽、などがありました。爪が真っすぐ地面に着かずに横になるのは、人工ふ化の個体ではよくあることです。ヒナが２kg以上になった個体を選んで捕獲しているので、この大きさに育つ間に大きな異常がある個体は、淘汰されるからでしょうか？意外に異常個体は少ないものです。

さて捕獲作業が終わると、今度は足輪を付けた個体が無事に生活を続けているかを確認に行きます。と言うことで十勝方面に出かけてみました。交通量の少ない道を走っていると道路に何やら細長い動物が出てきました。藪を出ると尾を高く上げて走り出したので「おー！シマリスだ！」小さな動物なので道路を渡るのには思いのほか時間がかかります。車の速度を落として安全な距離で道路を渡り切るのを見届けて走り抜けました。それからしばらく走ると、やはり同じようなところでまたまたシマリスが道路を渡るのを見ました。私にはまだまだ盛夏には間があるように思っていましたが、シマリスはもう冬ごもりの準備に忙しく働いているようでした。今年の十勝では４回もタンチョウのバンディングに出かけましたが、すべて曇りあるいは小雨で１日も暑い日がありませんでした。今年の作物の出来はどうなんでしょうか？心配もありますが、麦はすでに刈り取りが始まっていて特別ひどく遅れているようには見えませんでしたがどうなんでしょうか？梅雨明けがこんなに遅い年は今までになかったとかいうニュースも。釧路もさっぱり晴れ間がありませんね。それでもタンチョウのバンディングで晴れて汗をかいた日は、釧路・根室で数回はありましたか。

日曜日に霧多布の港へ行きましたが、もう鮭狙いでしょうか？沢山の釣り人が防波堤に並んでいるのが見えました。釣れているのでしょうか？本州ナンバーのキャンピングカーも見られ、これから盆休みにかけていつもの年のような釣り人の群れになるのでしょうね。新型コロナが広がらないか？と気になるほどの釣り人の群れになるのでしょうね。カレイ釣りの人も沢山いて大きなカレイが釣れていましたが、私はさっぱり釣れず、チカでもいないものかと撒餌を撒いてみましたが何の反応もなく、小魚１匹も釣果なしで帰って来ました。がっかりです。でも直ぐまた釣りに出かけることができるので、これはこれで良かったかも。タンチョウのバンディングでヒナを探して走っている時には全く見えなかった所で、調査終了後には簡単に見つけることができる、と言うのは毎年のことですが、今年もまた同様なことが起きています。なんとも皮肉なことです。中にはこんな山の中で？と言う所も。どこで営巣したのでしょうか？

ところで新聞のニュースではあちこちでクマが出没しているとか。どのニュースでも若いクマが目撃されているようですから、クマの繁殖状況が大変良いと言うことでしょう。クマは冬眠穴の中で出産し１年親子で暮らした後、もう１回この子と冬眠して翌年の春に子別れします。こうして親から別れた子グマたちが新しい自分の縄張りを作るまでに、あちこち歩き回るので、こんな子クマが人目に付くような場所に出て来るのです。そしてこんな子グマが親グマになるまで生き残るのは大変で、この時期に大半の子グマが死んでいきます。

〈句題〉　虫の声

「虫の声
　裁ちきる風の
　　機影かな」

「一声（ひとこえ）で
　全山唱和（ぜんざんしやうわ）虫の恋」

「昼と夜
　声色（こわいろ）かはる虫の恋」

（室蘭市　白波瀬　稔歳）